

佐田岬半島の冬鳥の特徴

※
丹 下 一 彦

はじめに

近年、各地で開発が進み、自然が少なくなるなかで、陸の孤島とも言われるくらい交通の便の悪い佐田岬半島は、まだまだ自然のたくさん残っているところである。しかし、伊方原発の建設により八幡浜市から伊方町の国道が整備され、また1985年には三崎から瀬戸町川之浜まで新しい国道が開通した。残る川之浜から伊方町の間も、間もなく開通することと思う。この道路が全面開通すれば、佐田岬半島も観光、レジャー、果樹を中心とする農産物の栽培により開発の速度はいままで以上に加速されてゆくものと思う。この道路が開通するまでに佐田岬半島の自然についての記録を残しておくべきと考え、秋の渡りの時期を中心に、年に5回ほど佐田岬に通っている。

佐田岬半島のおもしろさには、次の3点がある。まず第1は、半島や島には大型種が少なく、個体数も内陸部に比べ貧弱であると言われるが、調査を重ねるにつれ、想像以上に野鳥が豊富であることがわかってきた。第2は、佐田岬半島が渡り鳥のルート上にあること。これは、愛媛高校理科21号を参照していただきたい。第3に、松山周辺で見る鳥相とかなり異なっていることである。なかでも冬鳥は松山周辺ではなかなか見られない鳥を普通に見ることができる。そこで、冬期、1月から3月に佐田岬で観察したものだけをまとめてみる。

調査日と調査場所の概要

1982年3月9、10日に伊方町九町、1984年3月19日に瀬戸町塩成、1985年1月27日に伊方町九町及び籍戸町塩成で観察した。また、1982年2月26、27日沼口憲治氏が観察したデータも加えた。

〔伊方町九町〕

九町は八幡浜市に近いことと、伊方原発の建設により、佐田岬半島でも開発の進んでいる地域である。八幡浜から九町までの新しい国道は傾斜のゆるい宇和海側の斜面につくられている。道路端の傾斜面はミカン等、柑きつの果樹園が非常に多い。雑木林は尾根すじやミカン園の間にわずかに残されている程度である。大部分の林が樹高せいぜい5~10m位のアカマツ林である。しかもマツクイムシのため、枯れたマツが多く、林全体が乾燥した感じがする。

一方ビジターハウスのある九町越から瀬戸内側の亀浦

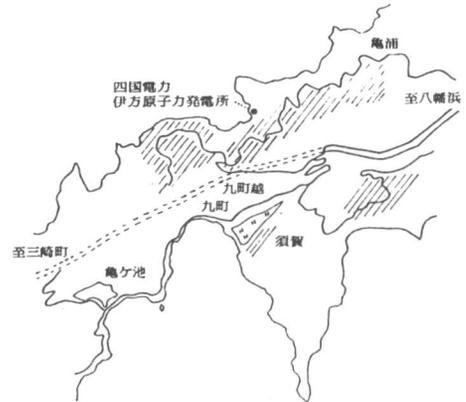


図1 伊方町九町の探鳥地（斜線部は探鳥に適した自然林のあるところを示す。）

のほうへ降りると、こちらの斜面は傾斜が急なため果樹園や道路も少ない。特に、九町越から亀浦、ビジターハウスから西の斜面にはシイの原木が多く残っている。伊方原発の緩衝林の中にはいることはできないが、手が加えられないため林が維持されている。この林は今後も手が加えられず、残りそうである。

海岸線は、瀬戸内側のほうに絶壁が多く道路から海岸線までかなり距離があり降りる道路が少ない。海岸まで降りる場合は、亀浦の漁港か、道路からかなりの距離を歩くしかない。また、浜は頭大の石ころや岩からできていて、砂浜はほとんどない。一方、宇和海側の海岸線は比較的緩やかで、道路も海岸線の近くを通るため、砂浜に降りることもできる。沖には定置網があり、船の往来が多い。

また、九町には佐田岬で唯一の水田がある。この水田は清水がわいているところがあり、一年中水がたえることがない。狭い場所だが、動植物共に興味深い場所である。

〔瀬戸町塩成〕

塩成は、三机への分岐周辺の集落である。狩浜には、佐田岬半島では数少ない川である塩成川がある。この川には河口がなく、国道の橋からは50m以上の絶壁を水が急激に落下している。

この塩成川が形成する谷は、ほとんど果樹園がなく、自然が残っている場所である。これは、この川が重要な



図2 瀬戸町塩成の探鳥地

水源となっているためと思われる。この谷は、たえず水があることと、両岸が急峻で手が加わりにくいこともあり、けっこうシイの大木も多い。

ところが昨年より、この谷の上流に新しい国道が建設されはじめ、上流部の環境がかなり変化してきた。この谷で野鳥の多い場所は、川沿いの上水道取水場周辺と、そこから500mほど上流の西斜面(左斜面)である。

結果と考案

観察した鳥は表1にまとめた。この中で、興味深い種類である、ヒヨドリ、シロハラとアカハラ、ワシタカ類、カモ類などの水鳥、ハクセキレイにしぼって考察してみる。

[ヒヨドリ]

冬期、佐田岬半島のヒヨドリは非常に多い。ヒヨドリは年中県内で見られ、繁殖もしている留鳥である。10月中旬から11月にかけて、渡りの時期には、1日に10,000~20,000羽もの群れが九州へ向けて渡ってゆくのが観察できる。このヒヨドリの行く先は、主に九州から奄美大島くらいまでで、沖縄半島まで渡ってゆくものは少ないと言われる。したがって、ヒヨドリの越冬地は主に九州以北で、四国の南予地方も最適の越冬地であろう。中予地方でも、冬になると松山市の城山や神社などでは、100羽以上いるのではないかと思うくらい、にぎやかに鳴きかわす声をよく聞く。佐田岬半島ではそのような場所によく出くわす。伊方町伊方原発の南側斜面や塩成の谷には、特にそのような場所が多い。ヒヨドリは、渡りの時期以外群れて行動することが少ないため、全体数をつかむのは難しいが、1つの谷で数百羽になるのではないかと思う。

1984年3月、農業によるヒヨドリの大量死事件があった。愛媛新聞によればこのときミカン園10アールに、

表1. 調査結果

※：冬鳥。冬期(12~3月頃)にかけてのみ見ることが出来る種類。-：少ない(1~5羽)。+：普通(5~20羽)。++：多い(20羽以上)。

調査年月日	伊方町九町				瀬戸町塩成	
	1982	1985	1984	1985		
種名	1/ 9	2/ 26,27	3/ 8,9	1/ 27	3/ 19	1/ 27
カイツブリ				-		
※ハジロカイツブリ				-		
※カンムリカイツブリ				-		
ウ sp. (ウミウ)		-				
コサギ				-		
※コガモ				++		
トビ		+	+	+	+	+
※ノスリ			-	-	-	-
ツミ					-	-
コジュケイ			-	-	-	-
ヤマドリ			-	-		
キジ			-			
イソシギ	-					
※タシギ				+		
※セグロカモメ				++		
※ウミネコ	+	+	+	+	++	++
キジバト		-	+	+	-	+
アオバト					+	-
コゲラ		+	+	-	+	-
ツバメ	-		-		-	-
キセキレイ	-		-			-
※ハクセキレイ				-		
セグロセキレイ	+					
※タヒバリ	-					
ヒヨドリ		++	++	++	++	++
モズ	-	-	-	-	-	-
※ヒレンジャク			+			
※ルリビタキ	-					
※ジョウビタキ						-
イソヒヨドリ		-	-	-		
※アカハラ			-		+	-
※シロハラ		+	+	-	+	+
※ツグミ	-	+	-	-		
ウグイス		-	+	-	+	+
※クイタダキ						-
エナガ		+	-	+	++	+
ヤマガラ	-	-	+	-	+	-
シジュウカラ		+	+	-	-	-
メジロ		+	++	+	++	++
ホオジロ	+	++	++	++	+	+
※カシラダカ		-				
※ミヤマホオジロ				+	+	+
※アオジ				+	+	+
カワラヒワ		++	+	-	+	
スズメ	-	+	+	-	+	-
カケス			-			
ハシブトガラス		+	+		+	
ハシボソガラス		+	+	++	-	+

1,500~2,000羽の死がいが見つかったという。この事件から1つの谷,あるいは1地域に生息する個体数は1,000羽以上いると見ても良いのではないかと思う。

ヒヨドリは,雑食性で果実や昆虫などを主に餌にしている。冬期は昆虫が少ないことや,地上の落ち葉を掘り返して餌をさがすことも少ないため,果実や種子が主な餌であると思われる。愛媛高校理科の佐田岬総合調査における植物班の植物目録により,秋から冬にかけて実をつけ,あるいは実を残している植物で,ヒヨドリの食べそうなものを選んでみた。主なものとしては,クスノキ,タブノキ,マンリョウ,モチノキ,ソゴ,ハゼノキ,クマノミズキ,ノイバラ,シャリンバイ,トベラ,マサキ,ホルトノキ,ガマズミ,シロダモ,ヒサカキ,ハマヒサカキなどがある。この中で,マンリョウ,モチノキ,ソゴ,ハゼノキ,ノイバラ,シャリンバイ,トベラ,シロダモ,ヒサカキの9種は割りと遅くまで実を残す種である。秋から冬にかけてまずクスノキ,クマノミズキ,シロダモなど,多分鳥にとってはうまいと思われる種が先に食べられ,実がなくなる冬期は,ハゼノキの実など上の9種が主な餌になっていると思われる。1月の塩成の調査中も,ヒヨドリがハゼノキに群がっているところや糞の中に,ハゼノキの実が含まれているのを見たことがある。その1日当たりの摂取量は,体の大きさからすると,かなり多いと思われる。佐田岬半島のヒヨドリが冬を越すためにどれ位の木の実が必要なのか調査を行っていないが,自然の餌が少なくなるなかでミカンなどの果樹にたよらなければならぬ面が多分にあるのだろう。

〔シロハラ・アカハラ〕

ウバメガシの林には,シロハラが非常に多い。林道を歩いていると,林内のあちこちで,グルルッという声をよく耳にする。このシロハラの中には,アカハラもよく混じっている。アカハラとシロハラは声,姿ともよく似ていることと,なかなか姿を目の前にあらわさないため,種類をはっきりと識別することは難しい。アカハラは,わきの橙色を観察することにより識別できる。また,飛び去るときに尾羽に白斑が出ないのもアカハラとして数えている。

シロハラの個体数は,九町,塩成ともに10羽前後で,それほど多くないようだが,声だけのものは数えていないため,時間をかけて確認していけば,個体数はかなりの数になると思う。また,アカハラの数についても同様で,10羽前後は観察できるものと思う。

南予地方の照葉樹林(常緑広葉樹林)にシロハラやアカハラが多いのは,生息に適しているためであろうか。

ヒサカキやウバメガシなどの低木林では,中にはいるのが困難なほど密生し,高木林では,樹冠が発達し,下草は少ないが,昼でも薄暗い。アカハラやシロハラは,このような林と道路きわに多い。アカハラの繁殖地は本州北部以北の低山帯で,カラマツ林や草原を有する高原地に多い。繁殖地では明るい林を好むのに対し,越冬地では薄暗い林に生息しているのはなぜだろうか。アカハラやシロハラは,照葉樹林の内部で生活するのではなく,林の周辺で生活しているのではないかと思う。林内は餌場や隠れ家として利用されているものと思う。

〔ワシタカ類〕

トビは半島のどこでも普通に見ることができる。これは,海岸線が多いため餌になる魚や動物の死体が多いのであろう。トビの個体数は冬になると増加している。トビの渡りを直接観察していないが,トビも越冬のために温暖な地方へ渡ってくるのではないかと思う。

ノスリは割と多く,佐田岬半島ではよく見かける。これは,小鳥類など,餌が豊富なためと思われる。

〔カモ等水鳥〕

カモ類は,伊方町亀ヶ池で観察したコガモだけである。人が近づけない海岸線が多いため,外洋性の海ガモが見られる場所があるのではないかと思う。ウ,アビの仲間も時折姿を見せる。ウは,海岸線に多いようだが,確実に見ることができる場所は,今のところ見つかっていない。

〔ハクセキレイ〕

九町の水田で1羽観察したのみである。畑地や河原が少しはあるが非常にせまく,海岸線が多いにもかかわらず岩礁が多いことから,ハクセキレイの生息には適していないことになる。中予地方で,ハクセキレイの多い場所は稲の刈り跡や河原などで,乾いた畑地や,山間部のせまい河原には少ない。ハクセキレイの生息には,耕地の面積と水に重要な関係があると思われる。

ま と め

以上の結果より,佐田岬半島に生息する冬鳥の特徴は,地形と植生に密接な関係があると思う。まわりを海に囲まれ,海岸線が多いことから,海上から調査をすれば,岩礁に生息する海鳥を観察できると思う。また,鳥相が中予地方の鳥相と異なるのは,植生,特に餌との関係が深いと思う。今後は,さらに冬鳥の餌と分布について調べ,越冬地としてどのような意味をもつのかを調べてみたい。

文 献

- 1) 丹下 一彦 (1984) : 佐田岬半島の渡り鳥,
愛媛高校理科, 21, P. 67-71
 - 2) 愛媛県高等学校教育研究会理科部会生物部門
(1984) : 佐田岬半島の生物,
 - 3) 環境庁 (1981) : 日本産鳥類の繁殖分布
 - 4) 高野 伸二 (1982) : フィールドガイド日本の野
鳥, 日本野鳥の会
-